

# Part2000 ◆ 「マクロ経済」への誘い

マクロ経済学の舞台の幕を開ける前に、2つのオープニングメッセージがあります。

一つは、「ミクロ経済」と「マクロ経済」の違いです。そしてもう一つは、マクロ経済の舞台に登場する「市場」の種類です。

## 1) 「ミクロ」と「マクロ」の違い

ミクロ (micro) 経済学での分析対象は常に「個々」の世界でした。  
 消費者理論では、個々の家計 (消費者)  
 生産者理論では、個々の企業 (生産者)  
 市場理論では、個々の財 (モノ・サービス)

これに対して、マクロ (macro) 経済学では、「国全体」を分析します。

1つの国全体の所得 → 国民所得といいます。  
 1つの国全体の生産量 → 国内総生産といいます。  
 1つの国全体の需要量 → 国際総需要といいます。  
 1つの国全体の財の価格 → 物価といいます。

## 2) マクロ経済学に登場するいろいろな市場

ミクロ経済学の舞台では財市場のみ登場しましたが、マクロの舞台では、実に多彩な顔ぶれの市場たちが登場します。具体的には、財市場に加えて、資産市場 (貨幣市場)、国際マクロ (国際収支)、労働市場といった市場たちが登場してきます。

そこで、これらの市場において、どんな分析手法を用いて何を分析するのか、その概略を紹介します。概略ですから、今すぐ具体的にイメージすることは困難と思いますが、目を通していただければ十分です。

市場の種類	分析手法	分析内容と分析の対象となる市場たち
財市場	45度線分析	国民所得と総需要、総供給の関係 財市場のみの分析
貨幣市場	IS-LM分析	利子率と貨幣需要、貨幣供給の関係 財市場と貨幣市場の同時分析
労働市場	AD-AS分析	物価と労働需要、労働供給の関係 財市場、資産市場、労働市場の同時分析
国際収支	IS-LM-BP分析	利子率と国際収支の関係 財市場、資産市場、国際収支の同時分析

## 3) 古典派とケインズ派

経済学に限らず、各学問分野には多くの学派 (同じ理論、学説を唱えるグループ) が存在します。古典派とケインズ派は、経済学において、対立する理論を展開する2大学派です。

実は、ミクロ経済分野では、両者の違いはほとんどないため、マクロ経済においても、財市場の分析で両者の違いが論じられることはありません。

両者の学説 (主張) が大きく食い違っているのが、貨幣市場と労働市場における考え方です。そこで、次ページでは、労働市場における両派の考え方の違いを紹介します。

古典派は「供給は自ら需要を生む」とするセイの法則（セイはフランスの経済学者）の法則を支持し、「価格は伸縮的なものであるため、需要と供給は必ず一致する」と主張しています。つまり、

[需要量] > [供給量] ならば、=になるまで [価格] は上昇し、  
[需要量] < [供給量] ならば、=になるまで [価格] は下落するから、  
売れ残りが生じるようなことは決して起こらず、つくれば必ず売り切れる。  
という考えです。

労働市場においては、需要量は求人数、供給量は求職者数、価格は賃金となり、上記の考え方を労働市場にあてはめると、

価格（賃金）は伸縮的なものであるから、  
[求人数] > [求職数] ならば、=になるまで [賃金] は上昇し、  
[求人数] < [求職数] ならば、=になるまで [賃金] は下落するから、  
売れ残り（労働市場では失業者）が生じることは決して起こらず、就業することを希望する人は、低賃金さえ許容できれば必ず就業できる。ということになります。

ところが、現実の労働市場においては、働きたくても働くことができない失業者が常に存在します。現在、日本で5%前後、米国で10%近い失業率が常態化しており、欧州などでは15%前後の国も存在します。

つまり、古典派の主張と実態は合致しません。この矛盾に気づき、「有効需要の原理」を提唱したのが、イギリスの経済学者のジョン・メイナード・ケインズ（1883～1946）です。

彼がこの矛盾について考慮することになったきっかけは、1929年、ニューヨークのウォール街での株価大暴落に端を発する世界大恐慌でした。何しろ、1929年には3.2%しかなかった米国の失業率が、1933年には24.9%にも跳ね上がったのですから、ケインズでなくても、古典派の理論の矛盾に気づくでしょう。

ケインズは、「失業の原因は、有効需要の減少と名目賃金率の下方硬直性にある」と主張しました。

「有効需要」とは、ただ単に「〇〇が欲しい」という願望（潜在需要）ではなく、買おうと思えば買えるだけの所得があって欲する需要です。

深刻な不況になれば有効需要は減少します。すると、企業は生産を抑え、将来の生産力増大のための設備投資（機械の導入など）を控えます。そんな状況でも、古典派の理論が成立するなら、失業は発生しないはずですが、にもかかわらず、実際には膨大な失業者が発生するのは、「労働市場における価格（賃金）は伸縮的ではなく、下方硬直的だから（そう簡単には賃金を下げられないから）である。」というのが、ケインズの主張です。

そして、そのような状況（民間の力だけでは脱出できない深刻な不況）に陥ったときには、政府が積極的に公共事業を行うなどして有効需要を増やすべきである。そうすることで、企業の生産活動や設備投資を活発にし、労働需要を増加させ、失業者を減少させるべきである。」…これが有効需要の原理です。

#### 4) 経済学は未知との遭遇

これはミクロ経済の冒頭でもお話したことですが、初めて学ぶ方にとっては、経済学は「未知との遭遇」の一種です。行き詰まったり、納得できない理論と遭遇するかもしれません。そんなとき、あまり完璧な理解にこだわり過ぎると、そこから一步も前に進めなくなってしまうことになりかねません。

完璧ではなくても、ある程度理解できたなら、これで良しと割り切って前に歩を進めていただきたいと思います。